

〔論文〕

子どもはいかにして‘音’を音楽するのか

——保育における仲間と共にとたく表現の過程から捉える——

横井志保

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

平成30年度に幼児教育に関する3法令が変わり、国では「主体的・対話的で、深い学び」が強調されている。子どもをめぐる環境は変化し、多種多様な問題を孕んでいるが日々子どもが心を動かすことのできるような体験をし、様々な経験を重ねることで感性や表現力が豊かに育まれよう。その中で、仲間と共に1つのことに取り組んだり、同じ経験をするのは子どもの大切な学びの1つとなろう。本研究では、クラスの仲間、複数人で音楽をする場面に焦点を当て、子どもがどのように他の音を受け取り表現するのか、また、その条件はどのようなものがあるのか幼稚園において実験的な実践を行った。その結果、以下の3点が明らかとなった。1. 2人で一緒にたたく場合、どちらか一方に始まりや終わり、奏法を合わせるが、真似られる、真似るが固定されず真似し合う。2. 2人でたたく場合、相手を互いに感じ合いながら表現し、受け入れられる関係が成立することで活動が持続する。3. 複数で表現する場合、他の音が感じられる距離が大切であり、ただ聞こえるだけではアンサンブルは成立しない。

キーワード：たたく表現、4、5歳児、音楽する、仲間と共に表現する、保育

How children make sounds into an ensemble

——Grasping from the process of drumming expression with friends——

Shiho YOKOI

Faculty of Health and Sports
Nagoya Gakuin University

1. 問題と目的

人は音の出るモノを前にすると、その音を試したくなる。子どもならなおさらである。筆者は保育における楽器による子どもの表現、ことに太鼓類等の打楽器、または楽器ではないが楽器同様の温かみを持った音のでるモノ（以下、音具）を使用して実践を重ねてきた。そして、子どもの表現のプロセスや表現したくなる環境、保育者の適切な援助等についてこれまで注目してきた^{1) 2)}。子どもは音を音楽にする過程において、殊にたたく表現では、音の探索や奏法のパフォーマンスを楽しみながら音楽することが、これまでの研究で明らかになった³⁾。

平成30年度に幼児教育に関する3法令が変わり、その中に「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」が示され、国では「主体的・対話的で、深い学び」が強調されている。子どもをめぐる環境は変化し、多種多様な問題を孕んでいるが日々子どもが心を動かすことのできるような体験をし、様々な経験を重ねることで感性や表現力が豊かに生まれよう。その中で、仲間と共に1つのことに取り組んだり、同じ経験をすることは子どもの大切な学びの1つとなろう。そこで本研究では、クラスの仲間、複数人で音楽をする場面に焦点を当て、子どもがどのように他の音を受け取り表現するのか、また、その条件はどのようなものがあるのか実験的な実践を通して明らかにすることを目的とする。

2. 方法

筆者が中心となって実験的な実践を行い、その経過を据え置いたビデオカメラと手持ちのビデオカメラで撮影、録画資料として分析した。

対 象：名古屋市内私立N幼稚園5歳児24名

小牧市内公立K幼稚園4歳児17名

実施日：2015年6月29日、7月6日（N幼稚園）

2016年2月15日（K幼稚園）

実践は担任保育者にも子どもと共に参加してもらい、筆者が実践を行った。（K幼稚園では一部他の研究者も実践を行ったが、本研究ではその部分を省き分析対象とはしていない。）使用楽器、音具と実践の内容は以下の表の通りである。実践は子ども同士の顔が見えるように配慮し、円形またはそれに近い形で椅子を並べて行った。

表1 N幼稚園の実践

実施日・場所	内 容	使用楽器・音具
2015年 6月29日 ホール	(1) 鈴付きループロープを持って鳴らしながらリズムにのって歩いたり走ったりする (2) ボディパーカッションでリーダー（子ども）の作った即興リズムを模倣してたたく (3) 子ども一人ずつカホンで実践者と交互に音（リズム）で会話（コールアンドレスポンス） (4) 実践者がたたくりズムを模倣する	鈴付きロープ カホン
2015年 7月6日 保育室	(1) ボディパーカッションでリーダー（子ども）の作った即興リズムを模倣してたたく (2) カホンとジャンベを使って子ども2人で音の会話 【事例1】 (3) 一人ずつ順にジャンベで即興演奏をする。他の子どもはボディパーカッションで「ドンドンパッ（足, 足, 手）」のリズムでオスティナート 【事例3】 (4) 実践者がたたくりズム（手拍子）を模倣する (5) 子ども一人ひとりの名前のリズムを手拍子で打つ (6) ピアノに合わせて歌を歌い、リズムあそび	カホン ジャンベ ピアノ (歌の伴奏用)

表2 K幼稚園の実践

実施日・場所	内 容	使用楽器・音具
2016年 2月15日 保育室	(1) 鈴付きループロープを持って鳴らしながらリズムにのって歩いたり走ったりする (2) 音具を使って音を好きに鳴らす 【事例2】 (3) 好きな音具を持ち、一人ずつ順に実践者と交互に音（リズム）で会話（コールアンドレスポンス） (4) 子ども同士で音（リズム）で会話	鈴付きロープ オケ太鼓, ゴミ箱（ポリプロピレン製・アルミ製）, 空の炭酸用ペットボトル

3. 結果と考察

(1) 相手に重ね合わせる

実践も2回目となり、音やリズムを呼応させるリズムの模倣やコールアンドレスポンス等も経験してきた5歳児。カホンとジャンベを使用した音の会話の活動では、「音でお話してみよう」という筆者の言葉に、即興で決まったペアは様々な表現を見せた。

【事例1 相手に合わせようとする】(N幼稚園)

子どもたちが円形に座っている中央にジャンベとカホンを置き、座席の順に2名ずつが音を鳴らしてリズムで会話した。ペアは、即興的に決まり、音を鳴らす開始と終了は自分たちのタイミングで決められた。どのペアも相談することなく、どちらか一方がたたき始めるとそれに合わせるかのようにたたき始め、終わると一緒に終わった。楽器は、1人が1つのジャンベまたはカホンを使用する場合と、両方を2人で使用する場合があった。また、どちらかが奏法を変えると、もう一方も相手と同じ奏法に変えた。1人がtremoloの様に連打すれば、もう1人も連打し、たたく動作を大きくすれば、同じ様に大きくたたき。打面をこすれば、真似てこすった。ただ、音での会話が実践者からの課題であったが、交互に鳴らすのではなく、どのペアもほぼ同時に音を重ねて鳴らし合っていた。

2人で音を出す場合、向かい合わせてたたき事で、相手の動きが先ず目に入る。そこで、どちらが先にたたかかという相談をしたり、約束事を決めなくても、どちらか一方の子どもがたたき始めれば、もう一方の子どもも釣られてたたき始める。そうであるので、どちらかが奏法を変えると、同様にもう一方も変える。音を聴いて変えるというよりは、動きを見て真似る。子どもは音楽しようとする過程で、先ずはたたき動作を楽しみながら音を出す。それは、2人で行っても同じであり、1人の場合は自分自身の動きを楽しむが、2人の場合は自分自身のパフォーマンスを楽しみながら、相手が面白そうな動きをしていると、それを自分の動きに取り入れる。そしてジャンベとカホンという音色の違う楽器の組み合わせの使用であったが、この場合、音色に意識が向くことは少なく、奏法に意識は向けられている。目を見合わせて微笑む様子からも、相手の動きに合わせてたたきことの楽しさが伝わってくる。お互いに相手を感じ合いながらたたいている状態と言えよう。

(2) 活動を持続させる映し合う関係

音具をたたいて好きに音の探索をしている段階であっても、他児の出す音やリズムを聞いたり、音の出し方やその動きを見て影響を受けたり、また与えたりする。活動を持続させるには、影響し合う関係が成立することが重要となる。

【事例2 真似し合うことが活動を継続させる】(K幼稚園)

音具が置かれている中からA子(女児)がポリプロピレン製のゴミ箱太鼓(以下ボリのゴミ箱太鼓)とオケ太鼓を床に並べて伏せて置き、両手で好きにたたいていると、それを見たB子(女児)は、それまでアルミ製のゴミ箱太鼓を手を持って底をたたいて音を試していたが、A子の前にそれを置き、更にボリのゴミ箱太鼓をA子の様に並べて置いた。B子はその後もA子の真似をして、両手でたたいたり、A子がペットボトルをバチにしてたたくと、自分も真似てたたいた。しばらくすると、B子がA子の前にあるゴミ箱太鼓と自分の前にあるものを交互にたたき始めると、A子にもそれを促し、縦に並んでいるゴミ箱太鼓と一緒にたたき始めた。しばらく続けたが、そこへ担任教師がペットボトルを手にして加わり、「トンウントンウン(●○●○)」と1拍たたいた後は1拍休むというリズムパターンをたたいて見せるとB子はそれを少し真似て、ちらりと担任教師を見たが、担任教師が何も反応しないと、また元の様に好きに両手で連打し始めた。声を出して笑いながら楽しく楽しそうなB子の前に、ゴミ箱太鼓が他児らからいくつか並べられると、あちらこちらに手を伸ばしてたたき、B子の興味はそれまでの‘音’から両手で交互にたたき‘動き’へと移っていた。

A子はリズムを好きにたたきことを楽しんでいたが、音の探索中のB子がそこに加わったことでリズムだけでなく音の探索も一緒にし始めた。B子にとっては、A子の音具の置き方やたたき方を真似することで、それまでの音への興味のみからリズムやたたき動きへの興味と広がった。A子とB子はお互いを真似しながら鏡に映し合う様な関係となり、それまで気付いていなかったことを互いに真似ながら気づきを重ねて活動を味わい深めていくことに繋がった。それは、ここまでの二人の活動の経過を見ていなかった担任教師が二人の活動に加わり、簡単なリズムパターンを提示して見せたが、真似たB子の表現を担任教師が受け止めて反応しなかったことで、その後に繋がらず継続しなかったことから、一方的な刺激ではなくリズムや音を受け取り同期させ次を表現し合うことで活動が継続することがわかる。

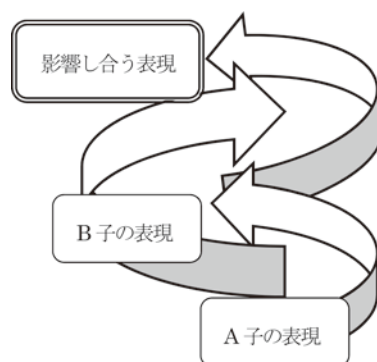


図1 影響し合う二人の表現

(3) 仲間と共に音楽するための条件

保育室でクラス全員が1つの円を作り中央に向いて座る。皆で揃って足や手を鳴らして同じリズムを打ち続けるが、それだけでは音楽しているとは言えない。そこには音楽を一緒にするための一定の条件が認められた。

【事例3 仲間との距離=音との距離】(N幼稚園)

ジャンベを子どもたちが円形に座っている中央に置いた。実践者の提示通り、周囲に座る子どもたちは足で2拍「ドンドン」と鳴らした後、手拍子を1拍、休みを1拍と続け、4拍を1つのリズムパタン（ドンドンパッ（足、足、手、休み）(●●●○)）として鳴らし続けた。中央のジャンベは、一人ずつ順に席から進み出て行き、好きにたたいて鳴らしたら、自分のタイミングで終了して席に戻った。周囲の子どもたちのオスティナートに同期させ、同じリズムでたたく子ども、連打を短くたたいて終える子ども、好きなリズムを自由にたたく子どもがいた。

本事例では、周囲でオスティナートしているのを聴きながら中央のジャンベまで走って進み出て、自分なりのパフォーマンスをしたら座席に戻るという一連の流れの中で、子ども一人一人が好きなように自由に表現することができた。ただ、周囲で鳴っているオスティナートのリズムと、中央で表現されるリズムには関係があるようには見られなかった。事例1の様な、相手を感じられる距離が本事例には無かったことは子どもが音を捉えるのに、耳（聴覚）だけを使用しているとは言えないことがわかる。オスティナートの音は保育室中に響いていても、中央でたたく子どもにとっては、オスティナートと中央でのパフォーマンスは切り離された別のモノと聞こえていたのだ。ただ、それまで自分がオスティナートしていたリズムをそのままたたく姿も見られた。それは、周囲のリズムを聴いて合わせたというよりは、それまで自分がたたいていたリズムを再現したにすぎない。子どもによっては、即興で1人でリズム表現する難しさもあろう。周囲のオスティナートと中央のジャンベによる即興的なアンサンブルは、アンサンブルの形はとっているが、アンサンブルとしては成立していなかった。オスティナートのリズムが4分音符で構成されていることも今後、見直す必要もあろうが、‘仲間と共にたたく表現’の条件としては、相手を感じることでできる距離が重要であることが示唆された。

総括と課題

仲間と共にたたく表現を中心に実践事例より分析、考察した結果以下の3点が明らかとなった。

1. 2人で一緒にたたく場合、どちらか一方に始まりや終わり、奏法を合わせるが、真似られる、真似るが固定されず真似し合う。
2. 2人でたたく場合、相手を互いに感じ合いながら表現し、受け入れられる関係が成立することで活動が持続する。
3. 複数で表現する場合、他の音を感じられる距離が大切であり、ただ聞こえるだけではアンサンブルは成立しない。

音は聞こえるものであり、また、感じるものでもある。子どもにとって、相手を感じられる距離が、音を感じられる距離となり、共に音楽することの大切な条件となろう。また、一方的な刺激だけでなく、互いに見合い、感じ合い、聴き合い、影響し合う関係が成立することで音楽がつけられる。

子どもはいかにして‘音’を音楽するのか

矢部⁴⁾は遊びの中で音楽的表現が共有される過程において次の3つの段階があると述べている。第一段階として「自分の「内なるもの」を他者に伝えたいという欲求が生じ、表現が生み出される」。そして、第二段階では「遊びの中で生み出された音楽的表現は、その行為に興味をもった友だちによって模倣される。」第三段階では「模倣によって、遊びのイメージや感情を共有した2人は、その楽しさや喜びを伝えるために、一緒に遊びながら音楽的表現を繰り返し、その行為は音楽的コミュニケーションへと発展をみせる。」というのだ。本研究のA子とB子が正にそれである。

子どもにとって音楽することは楽しい活動となる。また仲間と共に簡単に楽しむことができる。こういった活動を重ねることが音楽づくりに繋がると考えるが、好きに表現したものだけを集めても音楽としては成立しにくい。これら表現をどのように蓄積することが音楽として成立していくのかの検証は今後の課題としたい。

謝辞

実践に協力して下さった園の先生方と楽しく参加してくれた子どもたちに感謝致します。

引用・参考文献

- 1) 横井志保 (2010) 幼児の叩く活動に関する研究—表現を引き出す活動の流れと方法—, 名古屋柳城短期大学研究紀要, 第32号
- 2) 梅澤由紀子, 横井志保 (2010) リズム表現としての両手で叩く活動の構造と援助について, 愛知教育大学幼児教育研究, 第15巻
- 3) 横井志保, 五十嵐睦美 (2017) 子どもは音をいかに音楽するのか, 名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇, 第54巻第1号
- 4) 矢部朋子 (2011) 幼児の遊びにみられる音楽的表現の共有過程, 保育学研究, 第49巻第2号
- 5) 小林佐知子 (2019) 身体動作を媒介としたイメージの共有過程にみる幼児の協同性—わらべうたを教材とした表現活動の事例分析より—, 学校音楽教育実践論集, 3巻